

SER no.033; まえがき

| | |
|-----|---|
| 著者 | 佐々木 史郎 |
| 雑誌名 | 国立民族学博物館調査報告 |
| 巻 | 33 |
| ページ | 1-2 |
| 発行年 | 2002-12-20 |
| URL | http://hdl.handle.net/10502/1477 |

まえがき

佐々木史郎

本論文集は、平成12年度国立民族学博物館重点研究プロジェクトの1つである「人類学的歴史像の構築」の一環として行われた国際シンポジウム「東アジア・北太平洋地域の狩猟採集文化研究の新たな視野」(平成13年3月10日～11日に実施)の成果報告であり、また、平成11年度と12年度の2ヶ年にわたって実施された同じく国立民族学博物館の共同研究である「東アジア狩猟採集文化の研究」の成果報告でもある。まず、東アジアから北太平洋地域を専門とする考古学者と文化人類学者、民族学者が集まって共同研究会が組織され、そこで練り上げられた議論を基礎にして、海外から同地域を専門とする考古学者と人類学者を招いてシンポジウムを実施した。そこでは考古学と人類学が「東アジア・北太平洋地域」という研究地域と「狩猟採集文化」、「狩猟採集社会」という研究対象を共有しあって、活発な議論を展開した。

そのような共同研究とシンポジウムの成果として、共同研究員とシンポジウムの参加者たちが寄稿してきた論文は総計18本(編者の論文も含む)におよび、また、それぞれが力作であったことから、各論文の内容に応じて、2冊の論文集に編集した。1つがこの『先史狩猟採集文化研究の新しい視野』(国立民族学博物館調査報告33)であり、もう1つが『開かれた系としての狩猟採集社会』(国立民族学博物館調査報告34)である。前者は考古学の立場から狩猟採集文化、社会の研究の新しい視野を切り開こうとする諸論文をまとめ、後者には人類学、民族学の立場から書かれた諸論文をまとめた。両者はそれぞれ独立した論文集であるが、共同研究とシンポジウムの成果報告という性格は共有している。

当初この成果報告集は『国立民族学博物館研究報告別冊』として刊行する予定であった。執筆者たちにもその予定で執筆を行ってもらっていた。しかし平成14年度よりこの刊行物が廃止され、日本語で執筆された共同研究やシンポジウムの成果は外部の出版社に依頼するか、速報性、資料性を重視した『国立民族学博物館調査報告』で刊行することとなった。編者としては外部出版の可能性も考えたが、18編の論文、それも人類学と考古学と分野が大きく異なる論文をまとめて出版するのは非常に難しいことがわかり、さらに、速報性と貴重な一次資料も豊富に盛り込まれていることも考慮に入れて、『国立民族学博物館調査報告』として刊行することを選んだ。

本書ではできる限り用語、記号、略号などの統一を図ったが、各論文の著者の意向を汲んで、若干の不統一を認めている。例えば「縄文文化」の「縄文」については、一部の論文で「縄紋」という用語を用いている。また、考古学研究の根幹をなす炭素の放射性同位体¹⁴Cによる年代測定値については、想定される実年代との差を埋めるために歴年代補正を施した数値(補正年代あるいは較正年代)と、測定値そのもの(非補正年代あるいは非

較正年代)とがあり、それぞれ異なる略号が使われるが、採用される補正方法が地域や国によって異なり、また補正方法も日進月歩で変わっていることから、各著者の判断に委ね、本書としては統一した表記をせず、その都度初出時に注記することにした。